

離島における教育の実情と課題 Actual Conditions and Tasks of Education in Isolated Islands

原田純治, 村田義幸, 進野智子, 赤崎真弓
福田正弘, 平岡賢治, 小島道生

HARADA Junji, MURATA Yoshiyuki, SHINNO Tomoko, AKASAKI Mayumi,
FUKUDA Masahiro, HIRAOKA Kenji, KOJIMA Michio

長崎大学教育学部
〒852-8521 長崎市文教町1-14

Nagasaki University, Faculty of Education
1-14 Bunkyo-machi Nagasaki-shi Japan

本論文は、長崎大学、鹿児島大学、琉球大学が連携して行う事業の一部として、「離島における子ども理解と成長支援の方策の確立」班の長崎大学グループが平成17年度に行った研究成果を報告するものである。

Key words: actual conditions and tasks, education, isolated islands

長崎県には離島が多い。全国で260の有人離島の約21%にあたる55島が長崎県に存在する（平成15年度国土交通省離島振興課）。離島の子どもたちの教育環境には不利な点が多いと言われる。単学級という固定された関係の中での生活、異学年が同時に授業を受ける複式学級、図書館や美術館などの文化的環境に恵まれていないなど、そういった環境で育つ子どもたちは、学力や学習意欲が低い、表現力やコミュニケーション能力が低い、などと指摘される。

不利と言われる環境も逆に有利なものとして捉え、利用していくことはできないか。離島における教育に学ぶべき点は何か。この観点に立って、離島の小中学校を訪問し教員に聞き取り調査を行った。本報告は、離島における教育の実情とそこから導かれる課題をまとめたものである。

方 法

手 続 面接（聞き取り調査）

離島における教育の利点、困難点とその対処などについての質問を行う。
観察（授業見学）

授業中の児童・生徒を観察を行う。

調査期間 平成17年10月～平成18年2月

対象者 長崎県壱岐、五島の小・中学校教員（一部校長・教頭を含む）と児童・生徒
訪問した学校は表1に示す。なお、表中の教員数に校長・教頭は含まれない。

表1 聞き取り調査に訪れた小・中学校

地 区	学校名	僻地級地	学級数	児童数	教員数
壱岐市	初山小学校	1級地	6	62	7
	田河小学校	1級地	6	95	7
	鯨伏中学校	1級地	3	41	7
対馬市	佐護中学校	4級地	3	27	8
五島市	本山小学校	1級地	7	153	10
	盈進小学校	1級地	6	78	7
新上五島町	三井楽小学校	2級地	7	146	9
	津和崎小学校	4級地	3	13	3
	有川小学校	1級地	10	265	14

また、平成18年1月27日に行われた「五島へき地教育研究大会」（五島へき地教育研究連盟主催）に出席し、表2に掲げる小・中学校での公開授業を見学し、表3に掲げる小・中学校が行った実践報告と引き続いての協議会に参加した。この大会への参加を通して捉えることができた離島教育の実情と課題についても報告する。

表2 訪問校（五島へき地教育研究大会時）

地 区	学校名	僻地級地	学級数	児童数	教員数
五島市	岐宿小学校	1級地	7	90	8
	川原小学校	1級地	6	69	8
	岐宿中学校	2級地	7	139	12

注) 教員数には校長、教頭は含まない

表3 実践報告紹介校（五島へき地教育研究大会）

地 区	学校名	僻地級地	学級数	児童数	教員数
新上五島町	浜ノ浦小学校	2級地	5	49	5
	若松東小学校	2級地	7	104	9
五島市	玉之浦中学校	3級地	3	61	8

注) 教員数には校長、教頭は含まない

結 果

聞き取り調査から得られた回答を、離島地域の実態、離島教育の利点そして問題点の3つの視点から整理し紹介する。

1. 離島地域の実態

- (1) 市町村合併の進展は、学校の統廃合に波及する。五島玉之浦では、平成2年町立の3つの中学校（大宝、東、七岳）が統合し平成中学校が創立された。この平成中学校も、平成15年に残った玉之浦中学校と統合し現在に至っている。平成元年までは4校あった中学校も今では玉之浦中学校1校のみとなった。統合はされたが、現在の生徒数は62名、来年度はさらに減少して50名になると予想されている。
- (2) 卒業後は、職場や大学を島外に求めるしかなく、若年層を中心に人口が減少している。過疎化がますます学校を取り巻く環境を難しいものになっている。壱岐市立初山小学校と五島市立盈進小学校では、1年生が少人数であるため、来年度から2、3年生の複式学級を開設する予定である。
- (3) 農村地帯であるが、兼業農家が多く、大部分の人が勤めに出ている。子どもたちは、放課後帰宅後は家の中でじっとしているしかない。

2. 離島教育の利点

- (1) 子ども同士の関係
 - 1) 年少の者は年長の者を「～にい」「～ねえ」と呼び親しみを込めて呼んでいる。
 - 2) 習い事（習字が多い）に通う児童は少なく、放課後は皆で遊んでいる。
- (2) 教員と子どもとの関係
 - 1) 児童を呼び捨てにできるほど親しい関係がとれている。
- (3) 指導上の利点
 - 1) 少人数のため、どの子にも目が行き届く。結果、極端に成績の低い子がない。
 - 2) 職員数も少ないので、問題が起こったときや気になる子どもがいた場合、教員同士で情報を共有し、きめ細かな即座の対応ができる。
- (4) 地域や保護者と学校の関係
 - 1) 学校で行っている稲作やいも作りには全面的な協力がなされる。
 - 2) 異動が多い地域の学校では児童会活動での連帯感が持ちにくい。
 - 3) 学校行事などに地域住民も積極的に参加をし、学習発表会などには地元の地域住民だけでなく、他の地域の人びとも来訪するなど、地域との交流は盛んである。児童も、独居老人へ葉書を出したりするなど、地域の人びととの積極的な交流を行っている。但し、逆に言えば、地域住民との協力なしには大きな行事は成立しないという実情もある。
 - 4) 学校行事では、イネ、蕎麦、サトイモの調理教室を開いてもらっている。子どもたちに関わっていかうとする積極的な姿勢が見える。
- (5) 地域住民同士の関係
 - 1) 地域が狭いためいろんな人が子ども「～さん家の〇〇さん」であることを知っている。
- (6) 他校との交流
 - 1) 学校によっては、他校との交流授業も年に1回程度（6年生は3回）行い、修学旅行も他校と合同で実施している。

問題点

- (1) 子どもたちの実態
 - 1) 宿題はやってくるが、自ら課題を見つける意欲に乏しい。
 - 2) 自ら考えて動く、新たに何かを作り出すというようなことは、長崎市の子どもたちと比べて劣るように感じている。この背景には、互いに刺激を与えあうことが少ないことが関係しているかもしれない。
 - 3) 学力が低い。県下一斉の学力テストの成績がやや平均を下回る。問題解決的な学習を重点的に行っている。
 - 4) 学習意欲が低い。この点の指摘は多くの学校でなされた。単学級のために競い合いがないのが原因と考えられる。対策のひとつとして、基礎学力の徹底のために補修の意味で15分の時間を充てている。
 - 5) 家庭学習が不十分である。スポーツには熱心に取り組むが。
 - 6) 離島の子どもたちは、おとなしい、閉じこもっている、はじけていないという印象がある。
 - 7) 表現力に欠ける点がある。この指摘は多くの学校でなされた。話し方、聞き方、

話し合い, 話型を示し, 自信を持って表現できるように指導している。

- (2) 子ども同士の関係
 - 1) 生まれてからずっと同じ集団で育っていくので多様な考え方が育ちにくい。
 - 2) 小さな仲間集団から抜けて他の集団と仲良くすることが難しい。
 - 3) 保護者間の関係が子ども同士の関係に反映している。親戚同士の子どもが仲間関係を作ってしまう。
 - 4) 少人数クラスなので, 仲間意識は強いが, 学年が上がるにつれて友人関係や役割関係あるいは序列が固定してくる。いろんな場面で役割を交代させる, あるいは席替えをやってみるが意味がない。
- (3) 教員の子どもへの指導
 - 1) 目が行き届きすぎて, この指導は干渉ではないか, もっと子どもに任せた方がいいのではないかと感じることもある。
- (4) 教員の保護者への対応
 - 1) 保護者が少ないため, 少数の意見でも無視できない。
- (5) 保護者
 - 1) 地域や保護者は教育に対する関心が低い。勉強は学校だけで十分と考える親が多い。スポーツができて元気でいてくれさえすればの気持ち強い。
 - 2) 中学受験がないせいか, 親や周りから本人へ「勉強しなさい」とは言わない。
 - 3) 学校側への苦情が少ない。教育への執着心がないことの現れと思われる。
- (6) 環境
 - 1) 年間予算が10万円程度と少なく文化的環境としての図書の整備が難しい。
 - 2) 長崎市と違い, 博物館や美術館, 図書館などの文化的刺激を与える環境が非常に少ない。福江図書館の移動図書館が月1回訪問してくれるが。
- (7) 教員にとっての離島
 - 1) 教材研究などの資料や図書を求めることが難しい。福岡で求めることが多い。
- (8) 安全確保の面
 - 1) 集団登・下校を行っているが, 集合場所から自宅までの間ある程度の時間一人になる子がいる。
 - 2) 校区が広く, 登校に1時間以上かかる子どももいる。

考 察

離島における教育には, へき地にあり文化的・人的資源に恵まれない, 小規模であるために成員の流動性が低く友人関係や序列が固まりやすい, いい意味での競争がない, 複式授業では十分な教育ができない, などのマイナス面が伴うことが多く指摘される。

しかし, 環境や条件の不利を有利に変えることができないだろうか。少人数の集団では互いが協力しないと物事は進展しないのは事実だが, 教員, 保護者や地域住民, そして主人公である子どもたちがスクラムを組むことが新しい効果を生むはずである。たとえば, 複式の授業では, 低学年児は高学年児の学習内容を予習することができ, 高学年児は低学年児の学習内容を復習することができる。教え・教えられの共同作業を通して異学年同士のつながりを強めることができる, との声を聞いた。

6年生のある教室で, 授業の最後に教師が児童に質問した。「どうして6年生のこの3学期に田中正造の伝記を学習したのでしょうか」。「私たちが将来どのような生き方をし

ていくのかを考えさせるためだと思います」的確な回答であった。授業の成否は、離島の教育にあっても教師の確かな力量次第だとの印象をもった。五島へき地研究大会では、「へき地の小さい学校そのものが教育の原点であるという基本認識に立ち教育にあたる」ことが、基調報告の中で述べられた。